

緊急発掘調査報告

姥懐遺跡・更科裏の山遺跡

中野市教育委員会

序　　言

今回中野市東山住宅団地が造成されるにあたり、当該地区が姥懐遺跡として考古学上貴重な存在であるため、緊急発掘調査を実施し記録保存することになった。

この実施にあたつては長野県教育委員会社会教育課指導主事林茂樹先生のご指導のもと金井汲次氏はじめ多数の調査員、調査協力員の方々のご尽力をいただいてその目的を達し、ここにその結果をまとめ報告できるはこびとなつた。

この間調査研究に当られた方々の非常なご努力、ご労苦に対し深甚な感謝をさゝげる次第である。本書は小冊子ではあるが、ここに盛られた内容は必ずや学界にも貢献するものであるを信じ、広く学究各位にお届けできることを喜びたい。

終りに重ねてご指導、ご援助いただいた各方面と直接調査にあたられた各位とに感謝して序言とする。

昭和四十四年一月一日

中野市教育長　土屋忠男

一 総 説

(1) 調査の経過

戦中の食糧難時代に中野高等学校の手によつて比較的傾斜のなる一部分約一、三ヘクタールが開墾され、三年頃まで米等の雑穀が栽培されていた。三二年には中野市の主産業になつたりんごの栽培試験を行つたため市の果樹総合指導地となり、ダイナマイトを使って穴を掘り多くの品種のりんごが植えられた。しかし地盤が強粘土で生育が悪くその目的を達成することなく三八年には廃止された。

この年、中段の北寄りに中野警察署の射撃練習場が設置されたことになりブルドーザが入つて約一五メートル四方の平坦地がつくられた。

四一年になつて、市街地に近距離であるところから住宅団地がつくれられる事になり、四二年度から四五年度にわたりて嵯峨地蔵を中心周囲約六万九千平方メートルを造成して公営住宅一一〇戸、分譲住宅一九〇戸計三〇〇戸が建設される事になった。工事は予定どおり四一年から実施され、四二年度には九〇戸が完成する。嵯峨地蔵であるため宅地造成にはいくつかの段丘が造られるので切れ土が全域にわたつて、しかも大がかりに実施されるため現状は完全に移動してしまう。このため四一年の事業着手前に嵯峨地蔵内の道路状況を知る目的で緊急分布調査を実施した。

四二年に至つて、団地予定地内の入口に存する嵯峨山古墳は、四二年度から三か年計画で施行される農免道路国庫補助による農林省農用機械油税財源整備事業・中野高校南側を起点に道路の西側→更科→中野バスチック社南側の県道に接続する巾員六メー

トル、延長三、五一六メートルの道路工事の盛土用土取場として利用されることになった。山全体が削り取られるため緊急分布調査を実施して遺跡状況の把握をはかつた。

四三年度に入つて嵯峨地蔵南側の更科裏の山遺跡地域が造成地として買取されたので分布調査を実施したところ遺物の検出をみたので、さらに緊急発掘調査を実施した。

以上発掘までの経過の概略を述べ、調査状況を次に列挙する。

1、嵯峨遺跡分布調査

一、期日 四一年六月一九日、七月一日

二、場所 旧果樹総合指導地内

三、調査者

県考古学会(平岡小教諭) 田川幸生
市職員(元指導地作業者) 小林沢庄一

中野市更科 横原長則

県考古学会員(教委文化財担当) 小野沢 捷

中野市教育長 (故) 芳川 敏

指導者 日本考古学協会員(高社中教頭) 金井汲次

調査員 県考古学会員(平岡小教諭) 田川幸生

(尾代高校教諭) 岡田正彦

(教委文化財担当) 小野沢捷

中野市更科 横原長則

教委事務局 北川昭一

3、施設山古墳分布調査

一、期日 四二年一月四日、五日、八日

二、調査者 日本国考古学会員（高社中教頭）

県考古学会員（平岡小教諭）

（教委文化財担当）

調査協力 日本地質学会員（高社中教諭）

教委事務局

高社中学郷土クラブ

更科裏の山遺跡分布調査

一、期日 四三年一〇月一三日

二、調査者 日本国考古学会員（日野小教頭）

県考古学会員（平岡小教頭）

高社中学校教諭

調査協力 高社中学校教諭

（更科）

高社中学校教諭

更科裏の山遺跡緊急発掘調査

一、期日 四三年一〇月一日至七日、九日、一〇日

三、調査責任者 教育長

指導者 日本国考古学会員（日野小教頭）

教育次長（文化財担当）

（立正大学生）

（教委事務局）

金井汲次

3、箱山帶岩類

教委

（社会教育係長） 中丸政範

（社会教育係） 北川昭一

調査協力 日本地質学会員（高社中教諭） 中村二郎

高社中学校教諭 関谷照雄

南宮中学校教諭 永池 稔

山下似男

北川昭一

小野沢 勝

飯山北高等学校クラブ、高社中学校郷土クラブ

（小野沢勝）

4、施設遺跡周辺の地質

本地域の地質は、下位から別所層、玢岩、箱山帶岩類、崩壊堆積層に区分される。

1、別所層

模式地は中野市更科。熱変質作用をうけて灰色または暗灰色を示す珪質な頁岩である。板状に割れやすく、走向北北東、傾斜は 20°NW で砂岩に接するところほど強い変質をうけている。

本地蔵の別所層は施設遺跡地から更科、高通にわたって小分布するのみである。したがつて明らかな地質構造はつかめない。

2、玢岩

赤褐色を呈し、熱水変質したものは白色粘土化し、しばしば黄鉄鉱の結晶がみとめられる。施設遺跡地から更科、高通にわたって小分布するのみである。したがつて明らかな地質構造はつかめない。

夜間類福直ぐ南の通称紫岩から箱山、更科峠にわたって分布し、遺跡周辺においては、別所層ならびに粉岩を不整合におおう紫岩輝石普通輝石安山岩である。最高處でも海拔六九五メートルの低い山であるが、岩体は崩壊、浸食をうけて山骨の露出が著しく、栗和田地域では、中野扇状地砂礫層によつて埋められ、山脚がヒトデ状をなしている。

4. 崩壊地層層

箱山火山体の南部西南斜面の末端に位置し、嵯峨遺跡地ならびに、直ぐ北の東山園地にわかつて分布する。無層理の黄褐色泥土と泥質砂の中に角礫と亜角礫の箱山系の安山岩と珪質な別所層の頁岩を混える。

東山園地のおかれているところでは、有機炭質物の夾雜物を混え、また地形的にも明瞭な馬蹄形をなし、旧地すべり地形を呈している。

この崩壊地層は、末端において中野扇状地面によつて切断されているところから、中野扇状地面形成以前に堆積したものとおもわれる。

（中村二郎）

（三） 遺跡をめぐる環境

中野扇状地の東側に横を走る箱山と更科峠の急傾斜の山麓には所々に鋸歯状の小さないくつかの扇状地形がつくられている。更科峠の真下にある当遺跡は、その名も示すがごとく、她的あたたかい娘のように両袖状に山地のがいっている。日帰りのよい所で、早春の梅の開花は中野市内では一番早いところである。海拔はおよそ三七八メートルのところで、中野扇状地扇尖稍々下寄りに発達した小田中部落と、更科峠下の里地帯に展開する更科部落に夾ま



第1図 遺跡付近図（2万分の1）

- 1、嵯峨遺跡・2、嵯峨山古墳
3、更科裏の山遺跡

られたところに立地している。當遺跡付近には水もあるし、背面の山地は豊かな山の幸を求めることができ、すぐれた立地条件であることから、上古の人々の生活の舞台となり、墓域となつたもののことである。遺跡の立地するところの大半分は山林であったが、次第に開拓され畑地となつたが、前述のように中野市市有地となつてからは住宅園地造成の事業がすすめられ、現代風の住宅が年次計画によつて着々と建設されていわせにあるものをあげると次のようなものがある。

周辺地域には数多くの遺跡が点在しているが、當遺跡のすぐ隣り八メートルのところで、中野扇状地扇尖稍々下寄りに発達した小田中部落と、更科峠下の里地帯に展開する更科部落に夾ま

更科遺跡一部落全面にわたるもので、櫛文—早期撫手文、押型文、有尾式、上原式（多）鍬器、石鏟、打石斧、磨石斧、石錐、石匙、石刃、石皿、磨石、凹石。土師—前期、後期灰、高杯、甕、そ

の他破片等で、現在も地ならしや農耕の折に表される例が多い。昔代遺跡—東北約一〇〇メートルのところにあって、昔代部落の下寄りの地点である。櫛文—上原式、下島式、佐野式、磨石斧、打石斧、石匙、弥生—栗林式（少）太形給刃石斧、土師—前期、後期（少）

小田中遺跡—部落の中央から東の本田地帯にかけて所在し、東限は姥懸山古墳直下まで、当遺跡とはもつともかかわりない深いものであろう。湧水にめぐまれ、早くから水稻耕作が行われたものと推定する。弥生—箱清水式、太形給刃石斧、土師—前期—甕、甕、長頸瓶、鉢、碗、その他破片。当遺跡から南方へ一八〇〇メートルには間山遺跡があつて縄文期から古代にわたる遺物の出土で知られる。弥生後期の合口甕、銅鏡、古代の灰釉皿、管状土錐等は注目されてゐる。それから西へ一二〇〇メートルの小さな山頂に金鎧山古墳があつて、合掌型石室と五輪鏡、両刃鏡をはじめ多数の陪葬品出土で著名である。

当遺跡に立つて目を西方へ向けると北から南へ長く伸びた長丘、高丘丘陵がある。先土器、櫛文、弥生、古墳期の埋蔵文化財の宝庫として知られている。学術的発掘調査が行わって、その結果をまとめて報告書を刊行したものが七件に及んでいる。（金井汲次）

二 姥懸遺跡緊急発掘調査

〔予備・分布調査〕

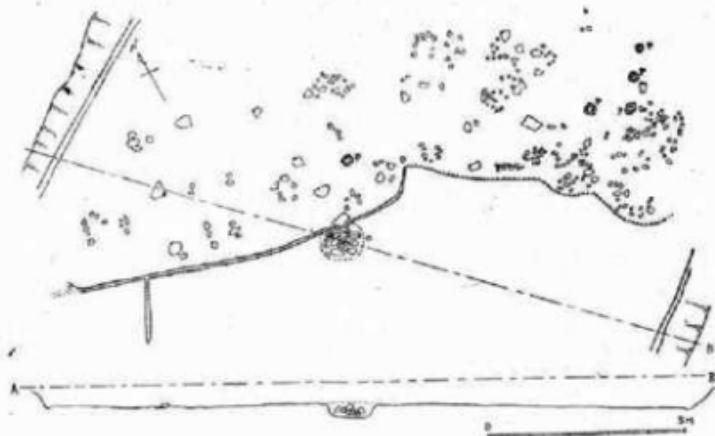
六月一九日予備調査。姥懸地盤の東部は耕作の機械化導入もあり、遺物は何等発見できなかつたが、北部から西部にむかう低地からは、土器片を主体に須恵器、黒耀石片数一〇点を採集することができた。特に土器片の分布の多いのは、中野警察署の使用していた射撃練習場附近であった。

以上の予備調査の結果にもとづき七月二日再度の調査にあたつた。

1、遭 構
射撃練習場跡は、中野市小田中姥懸一〇〇七と一〇九一一八の、中野市所有の畠地を地ならししたもので、北東から南西に向かつてゆるい斜面をなすところを、ブルトーザーにより、四方に向かってかき上げられた、約三アールに及ぶ平地である。そのため、ここの中東部は遺跡が破壊されており、調査は不可能であったが、中央部より南西部は、ほどよく露出しており、かえつて調査を容易にした。

まず最も保存状態のよいと思われる射撃場跡中央部を、ジヨレンで一センチ程けずり取つた。すると明瞭に土質を異にする二つの地区に分割された。即ち東西に走る細い溝を中心にして、北側に黒褐色の粘土質で大小の礫がみられ、また南側に黄褐色の粘土質の礫のほとんどない地区があらわれた。

細い溝は丁字形をしており、住居跡が北側に存在するかの如き様相を呈したので、特に北側馬土層の一部を調査してみると、大小の自然石の石組遺構がみられ、その付近からは木炭片にまじり骨片若



第2図 烟管遭跡実測図

千の採集をした。

これらの事実は、今後更に発展する可能性が生じたので、ここでひとまず調査を打ち切り、本格的調査を待つことにした。

2
通
緒

この射撃練習場跡の遺構の一部の確認の段階において発見された遺物は、細文式無文土器一片、土器碎片二〇片、須恵器片五片、鉄滓二個、骨片、木炭片若干であるが、緊急発掘調査の項で総合的に述べる事にするが、わずかの地域から多数の資料を得たわけである。

1
附錄

七月一七日(日)晴 分布調査のおり発見した東西に走る溝を追つたが、発展するきさしなく、そのため石組遺構を中心にして掘り進める数個位ずつ集まる大小の自然石にまじり、土器片が出土するも、非常に小破片である。主体は土器系切皿で、灰陶陶器、須恵器等の破片も若干あつた。

七月三日(土)晴 調査の範囲を東部に広げる。東部地区も黒褐色土質と黄褐色土質の区別が明瞭である。西部地区に比較して、遺物の出土は若干多い。ピット四個発見する、形、規模等はほとんど同一である。

七月二十四日(日)晴 昨日調査した地点を更に掘り下げるも、午前中成果少なし。午後になり中央部の溝付近の長方形の平らな石附近を掘り下げたところ、地中から石積み墓址と推定される遺構を発見した。石積みは直径一メートルの円形上に、大小の円礎を積み隙間に土師器、須恵器、灰釉陶器片がみられた。特に多いのは土師器である。午後七時三〇分夕やみせまり調査終了する。

2、遺構について

今回の発掘調査を通じて遺構を二つに大別される。それは黒褐色土地区を中心としたものと、黄褐色土質区を中心としたものである。

(1) 黒褐色土地区 (第二圖参照)

発掘地区の北側で、溝により仕切られている部分である。この土地特有の黒褐色粘土が堆积しているところである。特に注目するは、大小の砾からなる石組み遺構である。

その一つは自然の小石を三〇個位を、無造作に配置させ、木炭片にまじり、土器など的小破片が多量に散乱しているものである。石組を一つ一つ分け分割するには多少の無理もあるが、骨片の出土や完形品のない土器、無数の木炭などの状態から、他地区的類例から庶民の集団墓址であろう。

無数の小石の配置に対し単独に配置された大形長方形で表面が平らなものがある。あたかも土台石に使用すれば好適と思われるものである。(第二圖参照)

その外自然石の大きなものが遺構と無関係の如く配置されているが、今のところ墓地の境界を示す標子でもなく、砾の多いこの地帶に自然石もあって何等不思議はない。

石組の遺構の外に、ピットが四ヶ、「形にほとんど六〇~七〇センチの等間隔に配列した形で発見された。直徑はいずれも一五~二〇センチのもので、深さも一〇センチ前後の小さなもののある。黒褐色土質にもかかわらず、ピット内は黄褐色の粘土がつまつており、人工的なことはたしかである。残念なことにピット附近は、ブルトーラによる、けずり取りがはげしく、しかも市街地からの塵芥の一



第3圖 石積墓址

部が置かれたため、ピットとの関係は何物も把握することができなかつた事は我念なことである。

(2) 黄色褐色土地区（第二圖参照）

前者の南側である。表土を人工的に黄色土で固められており、表面はほとんど何物もない。黒色土との境辺にある溝の一部がこの地区へのびており、丁字形になつている。

調査の中心を前者に置いたため、調査の終盤になつてからの成果である。黒色土との接点に位置した長方形の平石附近を掘り下げたところ、大小一〇数個からなる碎半円球形に重ねた、地中の石積みの造構を発見した。底辺の直徑は約一メートルに及び高さは四〇センチほどで、その隙間からは、土器片を主に須恵器片や、灰釉器片を數片含んでいた。（第三圖参照）

この石積みを取りのぞくと、約一・二メートルの円形プランの深さ一〇センチの凹みを見出す事ができた。その内部のまわりを黄色の粘土で固めている。遺物として三片の土器片と、わずかではあるが骨片を取り出す事ができた。明らかにこれも墓例の一方法である。

黒色土層の墓例とは石材使用については共通であるが他は全く異にした例として注目してよいであろう。しかし遺物の種類よりすればほとんど同一時代のものであろう。

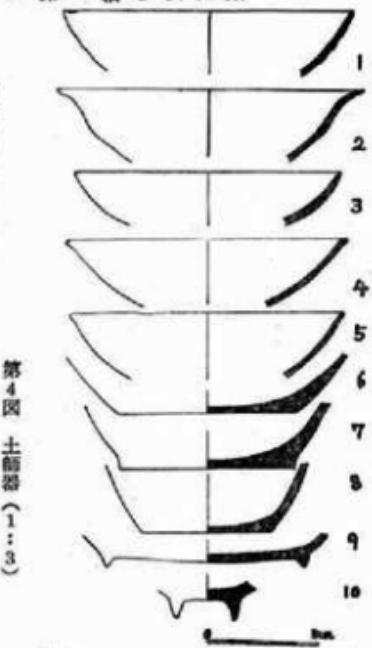
3、遺物について

今回の出土物の主体をなすのは土器で、その外石器、鐵器などである。

(1) 土器

縄文式土器、土師器、須恵器、灰釉陶器の四種あり、量的には土

器がほとんどで、他は一〇数点にすぎない。



第4図 土師器 (1:3)

縄文式土器一〇数点の破片であるが無文のものが大部分で、縄目文を全面に付したもの四片発見された。無文のものも相思品であつたりして、明らかでないが縄文前期のものか、いずれも表面採集や土器に混入して発見されている。

土器片大小の破片合わせて千点に達するが、器を完全に復元できることは全くない。第四圖の1~8はいずれも口縁部の復元図で大きさもほとんど同じく口縁二〇センチ内外で精巧にできている。6~7までは底部であるが、7~8は系切皿である。今回の出土の底部の約百点に及ぶが、そのうち九〇ペーセントは系切皿である。9~10は高台付底部である。

須恵器 一〇数点出土をみたが器形を知れるものは一点もない。

いすれも要形土器の副部砂片で、灰黒色の堅致なもので豊目状文、格子目文、無文の三種が見られる。格子目文の内側には花形の青海波文様が付されている。この他のものは、黒色土地区からも積石墓の遺構からも數点出土した。

灰釉陶器 これも完全な器形のわかるものは一点もない。厚手のもの薄手のものの各種各様である。注目すべきことは、灰釉部分ひび

焼き土器が二点発見されている。いずれも黒色土地区からの出土であるが、灰釉片の中でも美しさは別格である。⁽⁶⁾ おそらく灰釉片の出土は時代決定のかぎとなると思われる。他地区的出土の例からして平安時代の中期を降るものと思われる。

(2) 石器及びその他の遺物

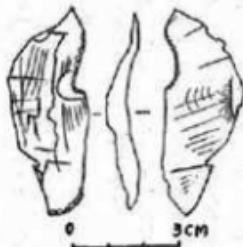
石器 黒色土地区から二点出土している。いずれも黒曜石製であるが、共に有柄部の一部が欠損している。片方の柄の短かい古式石器である。

ノツチ（第5図参照）一点ではあるが表面採集により得たものである。黒曜石製の弓なりになつた偏平な石器の彎曲した部分に、使用痕がみとめられる。これは鐵文式のものであるか、

先土器期のものは出土状態が表面採集なので何とも言えない。しかしながら、付近の地形状態から先土器期との関連も考えられる。

今後の調査を待つ。

第5図 石器 (1:2)



られるが、これと直接つながる關係品は見当らない。また骨や木片も若干採集した。
(田川幸生)

註1 松本市並木の室町時代の配石墓地の例小松慶氏の調査による。(一九六六年) 安源寺「中世、近世墳墓群の調査」

(一九六七年)

註2 桐原健「長野県中野市間山石動下遺跡調査予報」

三 姫懐山古墳累急分布調査

田園都市である当市は農業構造改善事業を強力に推進し農業の近代化につとめてきた。

昭和四二年七月、市において採択された当市の農免道路は三か年計画で、延長三、五一六メートルの工事を実施することになった。

初年度は中野高校下から更科部落に至る九五七メートルで、その施工区域内に姫懐山古墳の所在地が含まれている。姫懐山古墳の出土品は県下でも注目される貴重なものである。そこで施工前に調査を実施したのである。

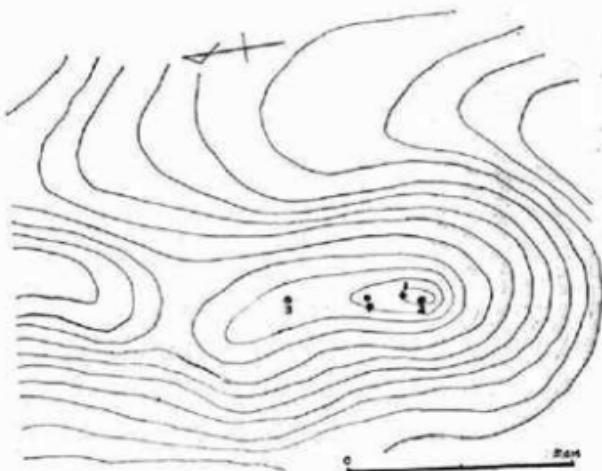
(1) 調査の経過

一月四日(土)晴 午前伐木。午後調査を開始する。墳丘北斜面に小さなビットを入れ一号とする。一〇センチずつに組み入り掘り下げ、四〇センチに及んだが、褐色の頁岩小片六点を得たのみであつた。

一月五日(日)曇 午前九時調査開始。

昨日に続き一号を更に掘りくぼめ、三〇センチで地山に達した。

その他 鉄錠が四点ほどみ



第6図 姥桜山古墳分布調査図

2は遺物出土地点

へ第三ビットを設けて調査した。地表下一〇センチ余で地山（褐色粘土）に達し、地表下二〇センチを掘つて止める。

一一月八日（水）晴 午後より調査開始。第一号の北八メートルの地点に四号ビットを設定。輪郭状の場所のため表土は流されて七八センチで地山に達した。地山は褐色の強粘質土で、二〇センチ掘りくぼめたが変化がないので作業を中止した。

以上三日に亘る調査を実施したが墳丘築造の跡は見られなかつた。先般出土した遺物は小円丘の西端であることと、極めて浅い所に置かれていたこと等を思いあわせて、調査員の見解としては、何等かの祭祀遺跡ではあるまいかということであった。

④ 駆出遺物

現在遺物は高井舟着神社（更科）に宝蔵され、文学博士小野勝年先生の由緒書がある。発見の事情や、性格について述べておられるので左にそれを掲載させていただき参考としたい。

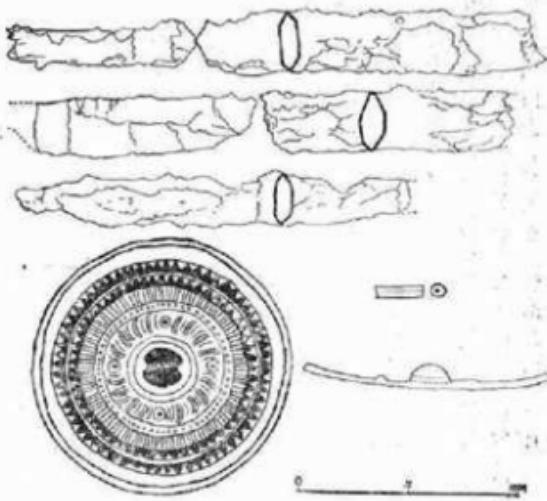
姥桜山古墳遺物由緒書

奈良博物館 小野勝年

此處に宝蔵する上代の遺物は昭和二二年一〇月一日日本村智原長則君によつて発見されたものである。場所は日野村と中野町との境界に近い姥桜山の突端なる丘陵上である。

発見の由来を訪ねるに丘頂部の樹の根元に鉄片が露出していたので土を除くとそれが並列する三振の鉄劍の一部分であり、而もその下には鏡鑑一面が裏面（文様部分）を上に向けて置かれ、附近には一個の管玉があつたといふ。それ以外には別に発見品とは無かつたが出土品の内容から考へて或はその場所から推して、これが墳墓築造の際、隨葬品として埋藏されたものであることは疑うべくもない。

午後、遺物発見者である智原氏が見えて、発見地点の教示を受け、第二号ビットを設けて調査する。土壠は相当擾乱されていた。本遺跡は、図上でも見ても、また遠くから眺めても一見前方後円墳と思わせるものがあるので、小門丘から北へ二三メートルのところは全然見られなかつた。



第7図 姉妹山古墳出土物 (1:3)

鉄劍は何れも腐蝕のため完形をとどめていないが長さ約二三センチ余、巾三センチの一振が比較的原形に近いと解され、これと他の一振は断面菱形を示し削たることが明らかである。鉄劍は径一、二センチ稍々薄手で鋒上りは後良である。四面の文様帶中外側二面は鏡畫文をめぐらし、第三面は櫛目文をなし内面は劍をめぐつて四本宛の粗縦文と四個の乳とを配している。

その様式上金糸山古墳より古く外形を異にするも埋葬法は瓦子塚古墳とは稍々共通したところがあり遺物の内容は更に旧い。若し人あつて強いて築造年代を求めるとするならば今を去る一五、六〇〇年の昔と答うべきであろう。

核するにこの古墳に於ける遺物は豊富とは申し得ない。然し鏡と劍と玉とよりなる点に於て單に上代貴族の最も貴重視せるもの

蓋し葬式神歌鏡より便化せるものであつて、その金属質及び文様から本邦に於ける仿製品であることが認められる。而もこれと同一鋏型と思われる遺品が既に美濃加茂郡板祝村から出土している。(平凡社美術全集五)

管玉は徑二センチ長さ二センチ軟玉製品である。これが單一であつたが勾玉等と共に胸飾の一部として用いられ後者が散在したものであるが明確でないが淡緑色のもので管玉としては古式であるからこれらの遺物は封土が自然に剝離された結果発見され、後世人的擾乱の跡は認められない。

埋葬当時の状態に就いて見るならば地上の上部を削つてその底部直径約一七メートルの円墳をつくり、その上部に比較的浅く石を用いず粘土一その表在から推して一様聚を作つたが、或は木棺などの可朽物を用いて葬つたであろう。何れにせよ、その内容から古墳築造の古式に属するものと推測される。従つて地理的観察から近畿地方に於ける同式の古墳築造年代より稍々おくれるとしても高井地方に於ける最古式の一であることは申すまでもない。

姉妹山は本村金糸山古墳とはるかに相対する景勝の位置を占め、遠く西方中野盆地を隔て長丘村七瀬翠子塚を望むことができる。

「……とにかく、我が歴史遺物の表徴とも通ずるものがある。これによつて一段の感慨をおぼへしむる。」

昭和二三年一月

（金井汲次）

四 更科裏の山遺跡緊急発掘調査

(1) 分布調査

越後住宅園地造形計画は着々と進み、新しく一二〇戸建設予定地は埋蔵文化財の包含地域であるため緊急分布調査を実施した。調査の次第は次のとおりである。

昭和四三年一〇月一三日(日) 備後晴 駅九時に調査員、作業員は現地に集合し、丘陵上の表面採集を行つた。黒羅石片四点、石礫片一点、土師器片一〇余点を得た。土師器片には糞切底片や、非常に細大な爛目文の発片があつた。

第一試掘穴を長さ三メートル、巾一メートルのものを九六七番地へ設定し、二〇余センチ掘りくぼめたが遺物は何物も検出することができなかつた。その西隣九六六番地へ第一号(三×一メートル)を設定したが何物も得られなかつた。

午後は丘陵南斜面の表徴を行い土師器片多量を採集したがいずれも細片であつた。裏の山三三五番地イ号へ、長さ三メートル、巾一メートルの第三、四号を設けた。第三号は黒色の表土が六〇センチ、それ以下は黒褐色の粘土質層であった。遺物は二五×四〇センチに多く、打石斧は表土下三〇センチ、黒羅石製無柄石鏟は表土下三五センチから発掘された。土器は土師器片、縦文土器片である。が文様は磨滅していた。土師器片も細片一〇余点を得たが器形

を知ることができないものばかりであつた。打石斧(第12図5)は硬砂岩で肥厚した粗野なつくりである。先土器期の貢石製(第12図4)はナイフ型石器である。

第四号は約三〇センチ掘りくぼめたが遺物は何等得ることができなかつた。これは褐色の表土三〇センチにつづいて黄褐色の粘土質土であつた。

以上の調査と、すぐ南隣三三四番地イ号は、かつて北信学生考古学研究会の調査によつて貴重な資料が検出されたことから、緊急発掘調査の必要があると認めたわけである。

（金井汲次）

(2) 遺跡の立地

前述のごとき分布調査の実施によつて、緊急発掘調査を行うことにした。

遺跡の所在する裏の山三三五番地イ号は南へ緩傾斜し、極めて日受けのよい場所である。標高はおよそ三九三×三九六メートルで現況は普通畑である。住宅園地造成のため当市が、地主翻田平吉氏から買取したものであるが、以前は草果園で一〇年前後のものが栽培されていた。調査時は、以前の草果は伐採されて、後に大部分にトマトを、僅少部に西洋菜が栽培してあつた。

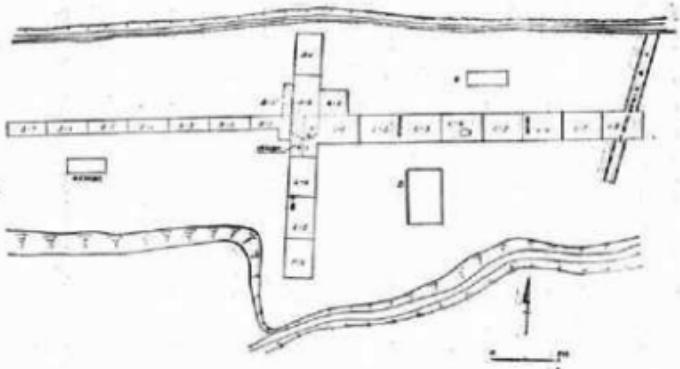
水は当遺跡の南方約八〇メートルの所を小さな川が東から西へ流下している。これは更科裏周辺の山地から流れ出る水を集めたもので、量はさして多くはないが年間を通じて水は求めることができる。

（金井汲次）

(3) 調査経過

一月一日(金) 晴 午後一時作業開始。

明日からの発掘調査に備えて、分布調査の際設定した三号試掘穴に



第8図 トレンチ図

並行してほぼ南北にAトレンチ(二×一八メートル)を設定した。更にAトレンチにはほぼ直角に、東西にBトレンチ(一×二メートル)を設定し、各トレンチを3メートル間隔にボイントを打つた。

一月三日(日)晴 午前九時作業開始。八名の調査員を中心としてAトレンチを飯山北高等学校Bトレンチを南宮中学校生徒、Cトレンチを高社中学校生徒が担当した。

CトレンチA-1区にかけて、表土下約20センチより東西にまつすぐ走る溝(巾約15×20センチ)が検出された。更に、C-2区とC-3区の中間、C-6区西側、C-8区中央の3ヶ所より南北に走る石列を検出した。

AトレンチA-1区からは、石器と磨石を検出した。本日は出土遺物が多く、Aトレンチにおいては、A-1区より鉄錠一点石錠一点、土器片若干A-2区より細文土器片數点、石錠一点、土器片多數A-3区(中央部)より細文土器片數10片、土器片多數が出土している。又A-1区と4区にかけて黒羅石片が多數散在していた。Bトレンチにおいては、B-1区B-2区よりそれぞれ石錠二点ずつ、土器片多數が出土しているB-4区からも石錠一点が出土した。

市役所から発掘用器材が届き、現場へ運搬する。午前中、調査員五名でAト

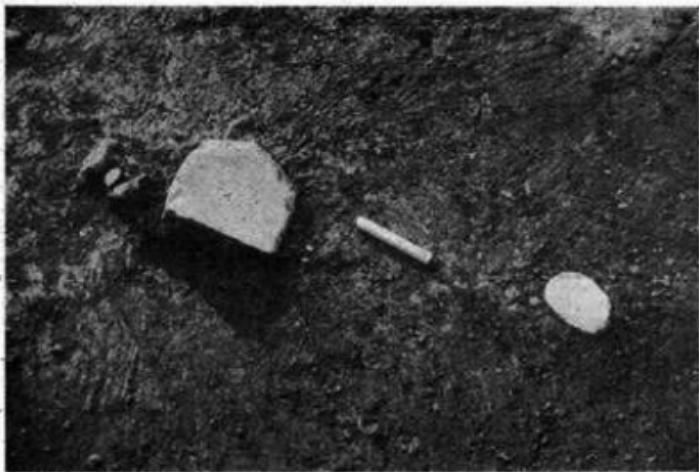
レンチ3区から調査をすすめ、Aの2、4、5区に及ぶ。

2、3区表土約20センチから土器片の出土をみた。午後、南宮中学校生徒15名の来援があり、Bトレンチ1~7区にわたり表

一月四日(月)快晴 午前九時作業開始。AトレンチA-1区とA-3区を調査する。A-1区において、石皿、磨石を中心として落ち込みが検出され、細文土器片數点、石錠

一点が出土した。

一月五日(火) 晴 午前九時作業開始。



第9図 石皿、磨石出状況

昨日に引き続きA-3区の精査併行してC-1区B-1区の調査を行なう。

A-3区の石皿、磨石を中心とした落ち込みにおいて、C-1区北側は、リンゴの木栽培の為付近が擾乱しておるとともに、B-1区においても南北に走る溝があつた為にこの落ち込みの性格を確認することは出来なかつた。落ち込み内からは、幾文土器片數点出土した。A-1区においては、大小二つのビット(P-1保約20センチP-2保約40センチ)が検出されP-1からは黒羅石片一点、P-2からは、土器器片數点が出土した。

一月六日(水) 曇時々小雨 天候不順の為本日の作業ははかどらなかつた。A-1区における落ち込みの性格確認の為にA-2区の東側に「××メートルグリット(A-1')」、西側に「××メートルグリット(B-1')」を設定し調査を進めた。A-2区からは、土面片若干、須恵器片二点、石鏡一点が出土したが、落ち込みの確認は出来なかつた。

一月七日(木) 晴 午前九時作業開始。

A-1'区およびB-1'区の精査を終えた後、測量に移つた。全体測量(縮尺100分の1)およびAトレンチ西壁面、Bトレンチ北壁面、Cトレンチ北壁面のセタショーンをとつた。

一月九日(土) 曇 午後一時作業開始。

CトレンチC-4区、C-5区、C-6区の調査を進めた。C-4区において長さ60センチ最大幅三三センチを計る。自然石(安山岩)が出土した。そして、石の北側周辺より黒羅石片三三点が出土している。出土遺物は他に土器器片數点である。

一月一〇日(日) 晴 午前九時作業開始。

C-13区南にDトレンチ（四メートル、五メートル）、C-14区、C-15区北側にEトレンチ（三メートル、一メートル）を設定し調査を行なつた。併行してC-18区出土の列石の確認を行なつた。Dトレンチにおいては、尋常の自然石が数個点在し、土器器片若干出土したのみである。Eトレンチにおいても、土器器片若干が出土したのみである。C-18区の列石は南北に約七メートルにわたつて存在していたが、おそらく挿本の施設であるものと思われる。夕方調査を完了した。

三

分布調査の折に設けた試掘穴第三号を起点に三つトレンチを入れ、その他小さなものを二つ設定した。

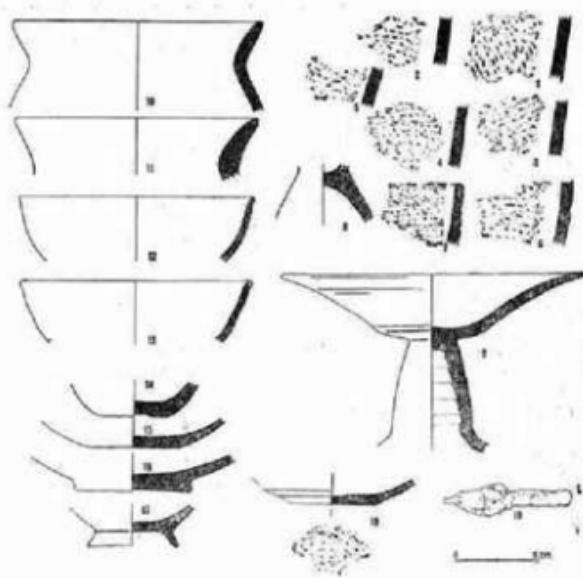
かに認め、付近の試験を行つた。特に A-3 に石頭と磨石が表土下四〇センチのところにセットして検出され、周辺には落ちこみや フト、壁を思わせるものも見られたが、ついに明確にすることはできなかつた。

されたい。
（金井正彦）

今回の発掘調査によつて得た遺物は、繩文土器片約八〇点、はづき形の土器器の高杯一点、土器器片約一六〇〇点須恵器片二点と、石鏡一三点、磨石二点、凹石二点、石錐一点、石斧一点そして鐵鏃一点とであつた。

三

(1) 繩文式土器(第一〇図1と2)
1は胎土、焼成ともに良好で褐色を呈し斜行網文をもつ。2は胎土、



第10回

焼成とも良好で茶褐色を呈し斜行繩文の上に連続刺突文をもつ前期（南大原式）に比定される。3は胎土焼成とともに良好であり暗褐色を呈し斜行繩文の上に連続刺突文をもつ前期（南大原式）に比定さ

れる。4は胎土焼成とも相應であり灰褐色を呈し胎土中には雲母を多く含んでいる。平行沈黙が施されている。5は、胎土焼成とも粗悪であり灰褐色を呈し、粒砂を含んでいる。6は、胎土焼成とも良好であり、褐色を呈し、通經制突文をもつ、7は、口縁部破片で胎土、焼成とともに良好で赤褐色を呈し、粒砂を含んでいる太い平行沈線を施している。

(2) 土器 (第一〇図-8 ~ 18)

高环形土器 (8, 9)
8, 9ともに胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈する。9は和泉期に比定されるもので、組みあわせ成形手法により、脚部には絞り痕、杯部には、ゆるやかな稜線を持つている。

環形土器 (10, 11, 14, 16)

10は口縁部破片で胎土、焼成とも良好で、赤褐色を呈し胎土中に粒砂を含んでいる。11は、口縁部破片で胎土、焼成とも普通で褐色を呈する。14, 16は、底部破片で胎土、焼成とも普通で褐色を呈する。

塊形土器 (12, 13)

12は、胎土、焼成とも普通で灰褐色を呈し胎土に粒砂を含んでいる。13は、胎土、焼成とも普通で褐色を呈し、粒砂を含んでいる。

杯形土器 (15, 17, 18)

15は、胎土、焼成とも普通で褐色を呈し、内面は黒色に研磨されている。

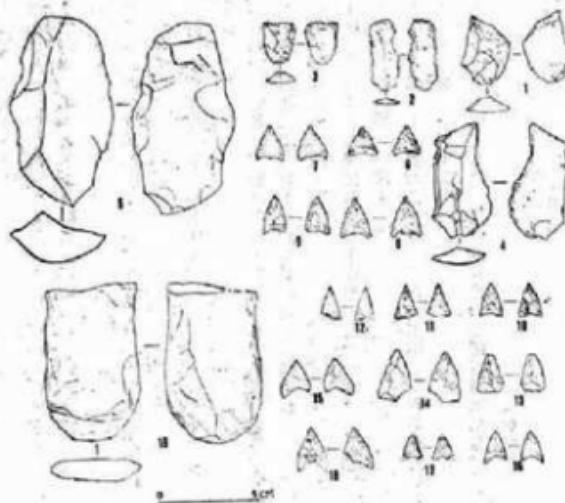
17は、高台付で胎土、焼成とも普通で褐色を呈し、内面は黒色に研磨されている。

18は、未切底をもつもので胎土、焼成とも良好で灰褐色を呈する。

A-11区より出土したもので、鋸と腐蝕がはげいたために、形がはつきりしないが、有些三角形式であろう。

3. 石器

石錐 (第一一図-16 ~ 18)



第11図 石器

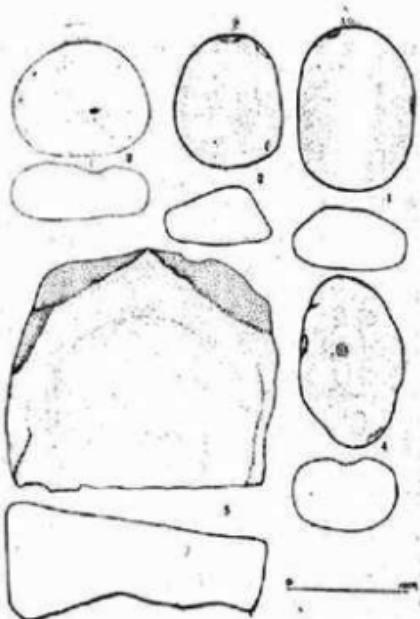
石器類のうち石器の占める量は多く13点を数える。黒曜石製が大半

で、石器のものが2点である。既て無柄の石器で6、7、8、10、13

、15、16は完形である。14はやや粗製である。

打製石斧 (19)

一点のみ検出された。頭部を欠いているが短軸型と楔型の中間形態



第12図 石器 (1-13)

を示す。硬砂岩である。

磨石 (第一二図1・2)

2点検出されたが安山岩製である。1は一枚のみ粗磨されているが、2は断面にみられるよう各段が磨滅している。

凹石 (3・4)

2点検出されたが安山岩製である。3は、同心円的な孔が表に一つ裏に二つ有する。

4は、表に不整形な孔を一つ有する。

石皿 (5)

安山岩を用いているが、約4分の1を欠失している。現存部で長径二センチ、短径二〇センチを測るが片面のみ利用している。

不定形石器 (第一二図3)

B-1区より出土した黒曜石製の不定形石器である。

ナイフ型石器 (第一二図1)

A-13区より出土し、質のあまりよくない黒曜石で作られている。

ブレイド (第一二図2)

A-13区から出土した。比較的良質の黒曜石製である。

(金井正彦)

五 遺跡周辺の遺物について

ここで述べる遺物は「信濃考古叢覧」に更科伊勢山下遺跡と記載されている場所のものである。当遺跡より今日まで、発見・発掘されたものと、昭和二四年三月に北信学生考古学研究会員の手によつて試掘されたものである。遺跡は大字更科字義の山三三四のイロ

畠地で、約三平方メートルの試掘であった。径二〇~三〇センチの石器片が多く散在するなかに土器片や石器等が発見されたが、住居址の確認はできなかつた。

次に土器類と石器に分けて報告したい。

(1) 土 器

(1) 押形文土器 ただ一片発見したのみで表面の磨滅がはげしく、性格の確認しがたい小片である。(2) 素面文土器 当遺跡の特長を裏付ける土器片で、縦横成いは斜に櫛目模様の沈線文をあらわしているが不規則な文様となつていて、貝殻の背で擦も含まれている。(3)

付ける土器片で、縦横成いは斜に櫛目模

様の沈線文をあらわ

しているが不規則な文様となつていて、貝殻の背で擦

つた様な文様のもの

も含まれている。(4)

素面文土器 これも

一、二点の発見にとどまる。(5) 角形文土

器 扁を背にして施

した様な模様が(6)と

組み合させて施して

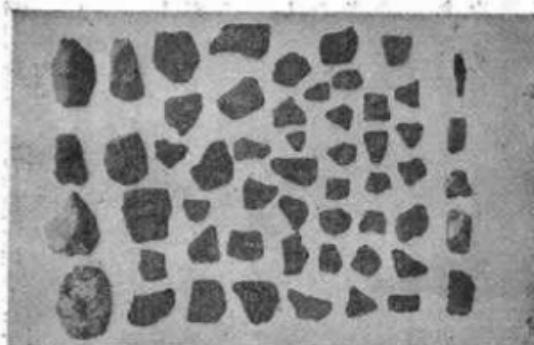
ある。(7) その他の土

器 細い棒状工具で

突いた模様、また、

土器面に細帯を施し

第13図 遺 物



て突きさした模様などがある。(8) 素面文土器 前記の文様を有する土器片の外、多數の素面の土器片が発見されている。

以上の土器片の大部分は鐵雜を含みもろい感じのものである。

(2) 石 器

(1) 平磨製石斧 一 一五六のイ番地(地主藤田草苗氏)の畠地から、当時東京から廻開していた笠井義程君によつて発見された長さ

一〇センチ余の局部磨製の逸品である。(2) 打石斧 小型と大型のものが一個ずつ表揚されているが両者とも白色の石を用い、石刀で瓜形石器といった形態をしている。内石錐 緩く尖つた三角形から底部に深く抉り込みのあるもの、等辺三角形のものなどが主体である。数例の有柄石器は他から混入したものと考えられる。(3) 打石器

割合に小型品ばかりで、大型のものは拾集されていない。よく使用されたらしく磨滅しがものが多い。削石器 完成品は無いが三個

発見されている。精円形のもので砥石として使用された痕のあるものも見受けれる。(4) 磨石 これも多數発見されているが角に当る部分に敵いた跡の有するものが多い。(5) 凹石 二と三箇所に小さな穴のある透有品と一個所に穴のあるものも発見されている。(6) その他の石製品 石錐、石刃等蒐集されている。

以上のうち石器、凹石は安山岩、石器、石製品は粘板岩が多く、珪石、黒耀石が次いでいる。

当遺跡出土品の概要を述べてきたが当地方の縄文早期遺跡の発掘調査例は無く、その性格の把握は困難を感じる。有尾式や次の南大原式とも、私の実見では眞あいが違つてゐるようと思われる。土器類は出土例が僅少のため考察は困難であるが、して言ひば、縄文早期末から前期初頭にかけての遺跡ではあるまいか。今後の資料の

増加を待つ、その性格を明瞭にしたいものである。（櫻原長朗）

六 結 び

姥懃遺跡は当地方にとつて貴重な埋蔵文化財を宝蔵している所と
して大事にされ、故神田五六、小野勝平、永峯光一、林茂樹先生等
が視察をしておられる。しかし住宅用地造成や農免道路の開設等か
ら遺跡の現状変更をしなくてはならぬ事情にたまつた。

そこで数次に亘り、予備 分布調査を行い、緊急発掘調査を実施
し、延三三四人（姥懃遺跡 六七人、姥懃山古墳 二六人、更科裏
の山遺跡一三一人）の方々の協力によつて精査することができた。
こゝに物心両面に亘りご協力ご配慮をいただいた方々に対し心か
らお礼を申しあげたい。

緊急発掘調査によつて前述のような豊富な資料を得ることがで
き、その都度孔版印刷によつて略報が出されていた。今回は、それ
をまとめたものである。したがつて一貫性を欠く面が多くあるが、
記録保存に努めて来た点をお認めいただき、何かの参考にしていただ
けるところがあつたとすれば、この仕事にたずさわつた者にとって
ては望外の幸である。

しかし記録保存には力を致したもの検出された遺構や遺物は予
想外に少なかつた。それは地質の項にも述べてある如く、極めても
ろい地盤にあたり、豪雨や豪雪のあつた時は地すべりや洪水が幾回
も繰かえされて地層の変化が著しかつたためである。流されたもの、
堆積されたもの、擾乱されたものが多くすでに文中でも述べた
ごとく、先土器期、縄文期、土師期の遺物がミックスして出土して

いる。そこで住居址、墓域等の遺構の確認されたものは積石墓址の一例のみであつた。この積石墓址の場合も平地に少し穴を掘りくぼめて納骨し、弔いのために石積みをしたものごとくであるが、埋葬後に山津波か何かの事情で山手から土砂が運されて埋没したよう
に観察される。

姥懃山古墳の分布調査は農免道路の土取場に予定されたために実施した。考古学、地質学の立場から三日間に亘つて調査をし、墳丘築造の跡を見ぬため、祭祀遺跡ではあるまいかとしたのである。われわれが分布調査を実施してから間もなく、施工の一部変更があつて、姥懃山古墳は現状を変更しないということになつた。これはわれわれにとっては最も有難いことであり、学界としても幸いなことであった。

本報告書は調査委員が分担執筆したもので急ぐのあまり不備の点ばかりであるが諸賢のご教示を賜わりたい。
（金井汲次）

後記

この報告書は東山住宅団地造成に開催して行われた昭和四一年八月上旬から昭和四十三年末日までにわたる間の猿橋遺跡、猿橋山古墳、更科裏之山遺跡の分布調査、緊急発掘調査を主内容とした報告である。

関係各方面、各位の絶大なるご尽力、ご協力をいただいて調査が無事終り、報告書上梓のはこびとなつたことは、喜びにたえない。尚今後更に調査を重ね資料を分析、検討することによつて遺漏なきを期したい。

現地に立つて見てその名のとおり猿の巣に危かれたような、ならかな南面の地形に古代人が心をひかれたことがよくうなづける。

又、眺めも素晴しく中野周辺地の西には北信五岳を仰ぎ、善光寺平の向こうにははるかにアルプスの峯々を望むことができる。

これ等の遺跡地はやがて三百余戸の新しい住宅団地として現代に活用されることになつてゐる。

この調査にあたつて、学業の間、特にご尽力いただいた学生、生徒、児童の方々を次に列記して心からなる感謝を捧げたい。

昭和四十四年二月一日 中野市教育次長 小林義謙

記
(敬称略)

立正大学生 秋山宏和 飯山山高生 中島庄一 高橋 均 大原正義 金井正三 水沢克己 猿橋高校生 金井文司 高社中学生 山崎光男 三沢一良 山田正二郎 小林清一 山口洋一 荒田博義 高橋義昭 高橋通博 藤沢幸充 清水幸美 若林庄二 小林住雄 佐藤信之 山岸弘士 竹内英夫 渡邉直文 豊田吉隆 佐藤和義

三井源夫 市川一男 梶原良比古 烏田徳夫 士屋鶴 山崎正男
土屋治幸 山田正文 田尻修 中島宣明 土屋直良 栗林一成
山田江市 江本忠雄 南宮中學生 兄島哲男 山本清文 武田雅文
齊藤文一 阿部善春 児玉忠士 田川具 丸山政弘 竹内常雄
間取紀男 小林正治 内堀隆 小林公治 小林秀人 両角重雄
中村幸典 中村明文 井上政道 流沢文雄 小林賢次 日野小児監
小根沢光 渡沢三男 小沢寿郎 小林宏子 鈴木穂子 田川博和
森山益雄

卷之三

論列篇

萬世之安樂也



別図版 第1
遺跡付近航空写真



別図版 第2
発掘状況（姫情遺跡）



別図版 第3
石組遺構（姫情遺跡）



別図版 第4
発掘状況（更科裏の山遺跡）



別図版 第5
台石（更科裏の山C-4）



別図版 第6
土師器（更科裏の山遺跡）



別図版 第7
石器（更科裏の山遺跡）